

< 墓 > 意識の多様化の背景⁽¹⁾
JGSS-2000/2001 のデータ分析を通して

岩井紀子

(大阪商業大学総合経営学部)

The Background of the Diversity in Attitudes Toward One's Own Grave

Results of Japanese General Social Surveys (JGSS-2000/2001)

Noriko IWAI

By analyzing data sets of JGSS-2000 and 2001 with cross-tabulations and logistic regressions, this study examines people's attitudes toward their own graves. It was found that 1) one's desire to keep one's own family grave and to be buried in there has weakened; 2) it has weakened especially among women; 3) unmarried women and divorced women consider wider options for their interment; 4) people who have no children (especially without son) and those who have children but do not want bother them tend to give up keeping thier own family grave and want to be buried in a communal grave with others; 5) people who want their ashes to be scattered over the ocean and/or mountains have stronger desire to return to nature; 6) thirty percent of them find no meaning in a conventional grave; and 7) in addition to demographic and ideological factors, economic factors also influence the changing attitudes toward one's own grave.

Key words: JGSS, grave, family system

本稿では、JGSS-2000 と 2001 のデータを用いて、< 墓 > 意識が多様化している状況をとらえ、多重クロスとロジスティック回帰分析でその背景を探る。< 墓 > 意識は、1) 家制度の影響を残しながらも、「家の墓を継承する」意識からの離脱傾向がみられる。2) この傾向は女性の方が強く、3) とくに離別・未婚女性で希望が多様化している。4) 「共同墓」希望者の大半は、「墓に入りたい」希望をもちながら、「子を煩わせたくない」「墓を守る人がいない」ために「墓」をあきらめている。5) 「子を煩わせたくない」は、娘のみの場合に強く、6) 「守る人がいない」は、息子のいるケース、娘のみ、子のいないケースの順に増す。7) 「散骨」希望者は、自然回帰願望が強く、8) その 3 割は「墓に意味を見出せない」。「墓離れ」は、9) 特定の世代や地域に限らず、10) 人口学的・理念的要因以外に、経済的要因も働いており、11) 「墓離れ」の背景は、男性と女性で微妙に異なる。

キーワード：JGSS、墓、家制度

1. はじめに

毎年、春や秋の彼岸や盆の頃になると、葬送や墓についてのニュースが報道される。寺社の墓地や公設霊園への墓参りの家族連れ相次ぐのニュースにまじって、近年は、さまざまな形の墓や葬送が紹介されている。

伝統的な夫の「家の墓」には収まりきらないが、なお家の形を求めようとする「両家の墓」、家の名前ではなく「偲ぶ」「無常」などと刻む「家名のない墓」、墓の後継ぎがいなくても個人単位で入れる「永代供養墓」、そして血縁や婚姻にこだわらない合葬形式の「共同墓」など、墓のあり方は多様化している。墓の形そのものも従来の「三段墓」以外に、墓石が連続する壁面式の墓、芝生に平面的な墓石を配する芝生墓地、ロッカー形式の墓、碑（いしぶみ）の下に共同で埋葬する共同参拝墓地、ついには納骨先にこだわらず、個人の経歴や写真、遺言、肉声に世界のどこからでもアクセスし、お参りできる「バーチャル霊園」も存在する。

<墓>は、都市における墓地不足が深刻な社会問題化した80年代後半から人々の関心を集めるようになった。当時は<墓>意識というよりも<墓地>の維持や確保に関心が集まっていた。しかし、人口学的変化（都市の過密と農村の過疎・高齢化、核家族化、少子化、離婚率の上昇、婚姻率の低下）と人々の意識の変化（家意識、宗教とのかかわり、葬送へのこだわり/こだわりのなさ、個性の強調、自然回帰志向、環境保全思想）などを背景として、<墓>意識は、この10年ほどの間に変化し、多様化している。<墓>意識の多様化は、「墓からの自由」などのリベラルな思想の広がりだけではなく、個人や家族を取り巻く現実状況への対応として、生じていると思われる。

本研究では、2000年に実施した日本版 General Social Surveys 第1回本調査(JGSS-2000)と2002年に実施した第2回本調査(JGSS-2001)のデータを用いて、<墓>意識が多様化している状況をとらえ、その背景を探る。

2. データと分析に用いる設問

2.1 データ

JGSS-2000とJGSS-2001の母集団は、日本全国に居住する満20歳～89歳の男女である。どちらも、層化2段無作為抽出法により、全国の300地点において、4,500人を抽出して対象としている。JGSS-2000は2000年10月末から11月末にかけて、JGSS-2001は2001年10月末から11月末にかけて実施した。JGSS-2000では2,893人から有効な回答を得ており、回収率は64.9%である。一方、JGSS-2001では2,790人から有効回答を得ており、回収率は62.4%である⁽²⁾。JGSS-2001の調査票は、JGSS-2000とほぼ同じであり、二つの調査データを統合して分析することができる。二つのデータを統合すると、有効回答者の総数は、5,683人となる。なお、JGSS-2001では、回答者本人のきょうだい関係だけでなく、配偶者のきょうだい関係についても尋ねている。

2.2 分析に用いる設問

JGSS では、面接調査法と留置調査法を併用している。回答者自身が墓についてどのように考えているかは、留置調査票において、以下のような設問で尋ねている。まず、「墓についての希望」を尋ね、「6 合葬式の共同墓」あるいは「7 海や山への散骨」を希望する人には、付問において、その理由を尋ねている。

Q42 最近、墓についていろいろな議論がなされていますが、あなた自身の墓について、どのようにお考えですか。一つだけ をつけて下さい。

- 1 私の家（実家）の墓に入りたい
- 2 配偶者の家の墓に入りたい
- 3 自分と配偶者の代から始まる墓に入りたい
- 4 自分と配偶者だけの墓に入りたい（ロッカー式の納骨堂を含む）
- 5 自分一人の墓に入りたい（ロッカー式の納骨堂を含む）
- 6 合葬式の共同墓（家族以外の人々を含む）に入りたい
- 7 墓に入らず、海や山への散骨にしたい

付問 「共同墓に入りたい」あるいは「墓に入らず散骨にしたい」理由はなぜですか。

あてはまるものすべてに をつけて下さい。

- 1 家または個人の墓に入りたいが、墓を守る人がいない
- 2 家または個人の墓に入りたいが、墓のことで子どもをわずらわせたくない
- 3 自然にかえりたい
- 4 家または個人の墓に意味が見いだせない
- 5 その他（具体的に_____）

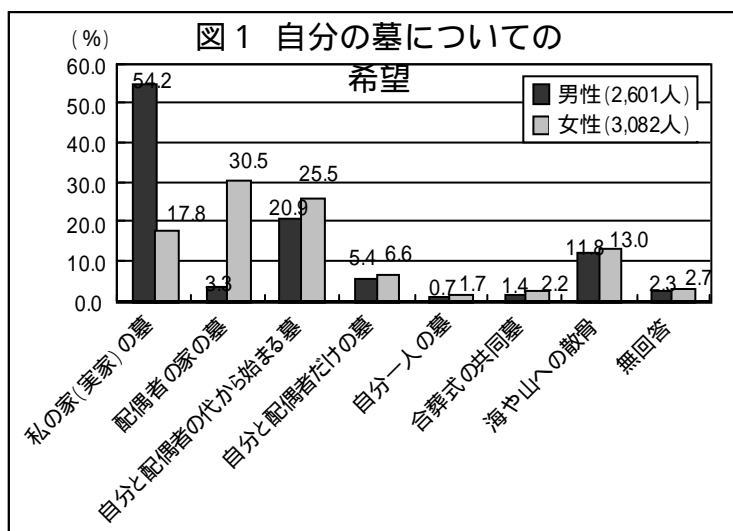
設問を作成するに当たっては、総理府の「墓地に関する世論調査」（1990年7月；人口30万人以上の都市に居住する20歳以上男女3,000人；有効回収2,061人）、野々山久也研究代表による「高度技術社会における家族のライフスタイルについての実証的研究」（1993年10月；東京都杉並区45～64歳夫婦家族1,711組；有効回収518組）、NHKの「現代日本人のライフスタイル調査」（1994年12月；全国16歳以上男女3,600人；有効回収2,441人）、森謙二主任研究者による「墓地に関する意識調査」（厚生科学研究；1998年2月；全国20歳以上男女2,000人；有効回収1,524人）などを参照した。付問については、本稿著者のオリジナルである。本問と付問の設定の仕方については、1999年3月に実施したJGSS第1回予備調査ならびに1999年11月に実施したJGSS第2回予備調査で得られた回答に基づいて、修正を重ねてきた。JGSSでは、前述したように5,683人（男性2,601人、女性3,082人）から回答を得ているので、多重クロスならびに多変量解析に十分たえられるサンプルサイズである。

3. 結果

3.1 「墓に対する希望」の多様化

まず、回答者が自分の墓についてどのような希望をもっているかをみてみよう。伝統的な家意識に従うならば、男性は長男であれば「私の家の墓」に、次三男であれば「自分と配偶者の代から始まる墓」に入りたいという回答が多数を占めるはずである。一方、女性、とくに配偶者のいる女性は、自分の兄弟関係よりもむしろ夫の兄弟関係に左右され、夫が長男であれば「配偶者の家の墓」に、夫が次三男であれば「自分と配偶者の代から始まる墓」に入りたいが多数を占めるはずである。

JGSS-2000/2001によると(図1)、男性では「私の家の墓」に入りたいという希望が過半数を占め(54.2%)、自分たち「夫婦の代から始まる墓」に入りたいという希望が続く(20.9%)。回答者の兄弟関係との関連をみると、「私の家の墓」を希望する割合は、回答者自身が長男の場合には3分の2(68.3%)を占め、回答者に兄がいる場合には36.3%に減少する。一方、「夫婦の代から始まる墓」を希望する割合は、長男では11.6%にすぎないが、兄がいる場合にはその3倍近い32.9%である。



回答者が女性の場合は、「私の家(実家)の墓」を希望する割合は3番目に下がり(17.8%)、3割の女性は「配偶者の家の墓」を希望し、4人に1人は「夫婦の代から始まる墓」を希望している。女性の場合は、兄がいるかどうかだけでなく、弟を含む男きょうだいがいるかどうかによって、回答に違いがみられる。「実家の墓」を希望する割合は、兄がいるケースや兄はいないが弟がいるケースでは14%にとどまっているが(13.7%、14.1%)、男きょうだいがいないケースでは28.1%に増加する。男きょうだいがいないケースでは「配偶者の家の墓」を希望する割合が、兄または弟がいるケースに比べて少ない(22.5% < 32.9%/34.5%)。

このように女性の希望は、男きょうだいの有無の影響を受けているが、配偶者のいる女性(死別を含む)の場合には、さらに、夫の兄弟関係との関連が認められる。「配偶者の

家の墓」を希望する割合は、夫が長男の場合には42.2%であるが、次三男の場合は23.9%に減る。一方、自分たち「夫婦の代から始まる墓」を希望する割合は、夫が長男の場合には20.6%にとどまるが、夫が次三男の場合には36.4%に増える。

直系男子のラインに沿って家を継承しようとする「家制度」は、第2次世界大戦後に民法の改正とともに消え去ったはずである。しかし、「家」の象徴のひとつである「墓」をどのようにするかについては、男女とも今なお、家制度の影響からまぬがれていない。ただし、男女の回答を比べてみると、家意識にそった回答は女性では、男性の場合ほど強くないことが窺える。上述したように、配偶者のいる男性は自分が長男であれば、「私の家の墓」を希望する割合が3分の2を占める。しかし、彼らの配偶者にあたる女性たち（長男の妻）の回答は、「配偶者の家の墓」に集中することなく、「夫婦の代から始まる墓」や「実家の墓」にも分散している。「実家の墓」に入りたいのは、未婚女性（34.1%）や離別女性（46.4%）だけでなく、有配偶女性ならびに死別女性でも1割を超えている（14.2%、14.1%）。

一方、「家の墓」ではなく、「夫婦の墓」に入りたいという希望は、男性の5.4%、女性の5.9%がもっている。「夫婦の墓」は子どものいない夫婦だけではなく（男性6.0%、女性14.0%）、子どもをもつ夫婦にも希望者が少なくない（男性6.2%、女性6.3%）。彼らは家の墓を継承するのではなく、夫婦の関係性に軸足を置いており、家意識からの離脱の一つの形であろう。

さて、「墓に入らず、海や山への散骨にしたい」という希望は、男女とも1割を超えている（11.8%、13.0%）。散骨は、中国の周恩来元首相（1976年没）やアメリカのライシャワー元駐日大使（1990年没）の葬送⁽³⁾および1991年に発足した「葬送の自由を進める会」の活動などで認知度が高まっている。男女とも20代や30代の若い世代で希望者が多いが（15.8%～19.6%）、女性では40代でも17.0%が、50代でも14.5%が散骨を希望している。配偶関係との関連をみると、男女とも未婚者ならびに離別者で希望が多い（18.1%～21.4%）。ただし、女性では有配偶者でも13.1%が希望している（有配偶男性では10.4%）。「散骨」を希望する87歳の死別女性は、「夫がギャンブルでひどい人だった」からと、具体的に理由を述べている。

墓に対する意向は、離別女性と未婚女性ではとくに多岐にわたっている。離別女性の9.8%は「自分一人の墓（ロッカー式の納骨堂を含む）」に入ることを希望し、8.9%は「合葬式の共同墓（家族以外の人々を含む）」を希望している。離別男性では「一人の墓」を希望する者はなく、「共同墓」を希望する者もわずか1.7%にすぎない。一方、未婚女性の1割は「自分と配偶者だけの墓に入る（ロッカー式の納骨堂を含む）」ことを望んでいる（未婚男性では3.4%）。

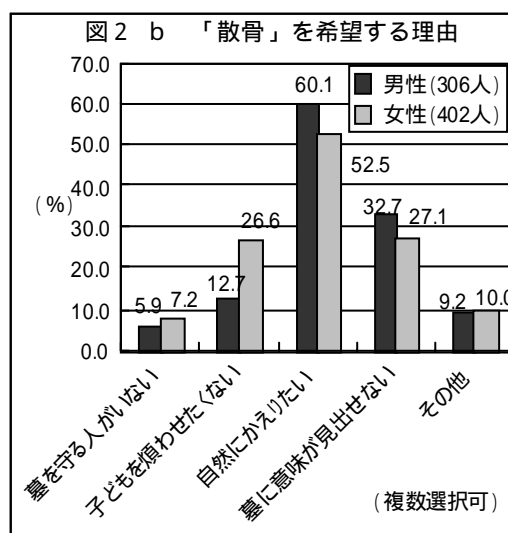
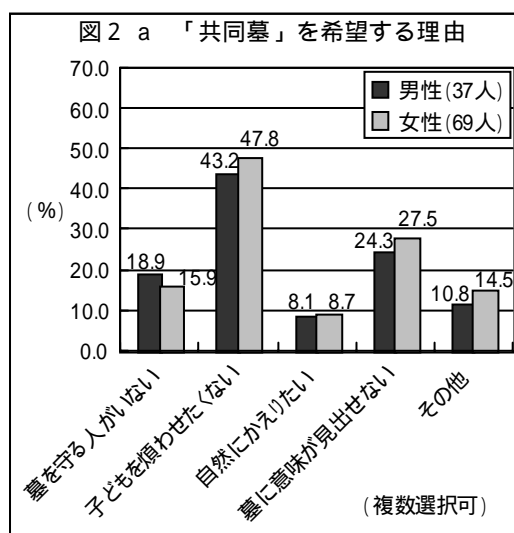
3.2 「共同墓」「散骨」を希望する理由

「共同墓」または「散骨」を希望する回答者には、その理由を尋ねている。図2 a(次頁)には「共同墓」を希望する理由を、図2 bには「散骨」を希望する理由をそれぞれ男女別に示している。二つの分布は明らかに異なっている。

「共同墓」の希望者では、男女とも「家または個人の墓に入りたいが、墓のことで子どもをわずらわせたくない」という理由が45%前後を占めている。さらに、「家または個人の墓に入りたいが、墓を守る人がいない」という理由も男性の18.9%、女性の15.9%が選択している。すなわち、「共同墓」の希望者のうち、男女とも6割以上は、本来は「家または個人の墓に入りたい」が、子ども(とくに男子)がいなかったり、子どもをわずらわせたくないという理由から、やむをえず「共同墓」を選択しているのである。「共同墓」を希望している人のうち、「家または個人の墓に意味が見いだせない」ことを理由にあげている人は4人に1人である。「自然にかえりたい」という理由を選択した人は、1割を下回る。いずれの理由についても、男女で有意な差はない。

「共同墓」を希望する人の中には、信仰する宗教の人々と同じ墓に入りたい(39歳女, 50歳女, 62歳女, 76歳女)という気持ちから選択する人もいる。さらに、信仰する宗教はないけれども「仲間と一緒にいた方がいいから」(24歳男)、「死後もいろいろな人達と過ごしたいから。個人の墓地に入ると、それ以外の世界がもてない気がする」(42歳女)という回答もみられる。

「合葬式の共同墓」としては、京都嵯峨野の『女の碑』(戦争世代の未婚女性を中心として発足)、東京都豊島区すがも平和霊苑の『もやいの碑』が知られており、各地に広がつつある。いずれの会も、会員は生前に交流をもっていることが多い。



一方、「散骨」の希望者では、「自然にかえりたい」という理由が最も多く、とくに男性では6割を占め、女性に比べて有意に多い(p<.05)。次いで約3割が「家または個人の墓

に意味が見いだせない」ことを理由としている。「共同墓」の希望者に比べると、子ども絡みの理由をあげる人は少ないが、女性の4人に1人は、本来は「家または個人の墓に入りたいが、子どもをわずらわせたくない」ことを理由としており、男性(12.7%)に比べて有意に多い($p < .001$)。「その他」の具体的記述の中にも、そもそも「墓」というものには入りたくないが、とりわけ「子どもに負担をかけ」たり、「押しつけ」たくないからという記述が目立つ。すべて女性から寄せられたものである(33歳女, 36歳女, 38歳女, 50歳女, 52歳女, 52歳女)。こうした記述は、「共同墓」を希望する女性にもみられる(51歳女, 58歳女)。「墓」を継承するのは、直系男子であっても、実際に「墓」の守や檀那寺との関係で発生する事柄は女性に任されていることが多い。50歳の女性は「墓の管理も大変」と心情を吐露している。女性自身が経験したその負担感が「単に墓のことで子どもをわずらわせたくない」、「将来に渡って子どもをわずらわせたくない」という言葉に繋がるのであろう。男性の中にも、「現在守に困っている」から「散骨」を希望したい(68歳男)と述べている人もいる。

前述したように、「散骨」を希望する人には自然回帰志向が強く、「散骨」を希望する具体的な記述でも、人と自然の関係に触れられている。「人も自然界の動物です」(48歳男)、「死亡したら、人は土にかえるものだと思う」(31歳女)、「環境破壊したくない。地球全体を人間の好き勝手している。人間はもっと他の生物のことを考えるべき」(55歳女)、「人が死ぬ度に墓を作っていたら、狭い日本が墓だらけになってしまう」(20歳男)。

「散骨」希望者の中には、「墓」のもつイメージを好きになれず、自然にかえるという考え方にロマンを見る者も少なくない。31歳の女性は「墓に良いイメージがなく」、36歳の女性は「墓はこわいイメージがあり、自分がそこに入ることがイヤ」だとしている。

では、どこに「散骨」したいかと言うと、「大好きな場所」(大阪府在住21歳女, 大阪27歳男)という回答のほかに、山や海あるいは「宇宙」も出てくる。22歳の女性は「宇宙に飛ばしてほしい。『空見上げれば墓参』ってな具合に」。33歳の女性も宇宙を希望している(いずれも東京在住)。海については、「海が好きである」(香川46歳男 東京70歳男)、「海の上をゆっくりと流れていたい」(佐賀54歳女)、「エサにでもなればいい」(愛知28歳男)という希望のほかに、「戦艦大和の沈んでいるところ」(東京32歳男)と場所を特定した回答者もいる。

山についても、「山が好き」(栃木56歳女)というだけでなく、「桜の木の下に埋めてほしい」(北海道24歳男)、「山などに散骨。記念に桜の木を一本植えてほしい」(東京33歳女)と、「樹木葬」を希望する回答もみられる。「樹木葬」は近年、自然を愛する人の間で広がりを見せ、都会の夫婦や女性が、山里の墓地をもつ寺と生前契約を結ぶケースが少なくないという(『朝日新聞』2003年2月25日)。「散骨」希望者の中には、「すでに献体(登録)してある」から、後は散骨してほしいという希望もあった(愛知57歳男)。

「共同墓」と「散骨」の希望者を合わせて年齢別にみると、自然回帰願望は、男性では

50代と60代を除くどの年齢層でも過半数を占めており、女性の場合は20代と60代で過半数を超えている。「墓に意味を見出せない」人は、男女とも若い世代ほど多い傾向があるが、女性では40代で最も多い(46.6%)。「子どもをわずらわせたくない」気持ちは60代の男性(26.8%)と50代の女性(40.8%)で強い。「墓を守る人がいない」ケースは、男性では60歳以上の世代で、女性では50歳以上の世代で1割を超える(12.5%, 13.0%)。

3.3 子どもの性別や信仰と墓の問題

家や個人の墓に入りたいけれども、「墓を守ってくれる人がいない」や「子どもに迷惑をかけたくない」という状況は、回答者に子どもがいるかどうか、さらに家名や墓の継承者としての役割を担う息子がいるかどうかと関連している。「墓を守る人がいない」という回答は(未婚・離別者を除く)息子のいるケースで最も少なく(1.9%)、娘のみのケースで8.7%、子どものいないケースでは26.6%であり、子どもの構成と強く関連している($p < .001$)。一方、「子どもをわずらわせたくない」という回答は、息子のいるケースよりも娘のみのケースで多い($26.3\% < 40.7\%$; $p < .001$)。とくに男性の回答において、その差は顕著である($13.9\% < 39.3\%$; 女性では $34.2\% < 41.6\%$)。息子がいても、遠くに住んでいるのでは、「墓を守ってほしい」とはとても頼めないし、娘ではなおさら言い出しにくいのであろう。

大阪府に住む63歳の男性は、息子はいるが墓のある「鹿児島は遠い」からと、「共同墓」を希望している。島根県出身(15歳時)で現在京都府に住む68歳の死別女性も、息子はいるが「墓が遠いから」と、「散骨」を希望している。長野県出身で栃木県に住む53歳の女性は、息子はいるが、「この土地に代々住むかどうかもわからない」から、また、娘が2人いる52歳の男性は、「老後がわからない」から、それぞれ「散骨」を希望している。

子どもがいない場合には、男女とも「散骨」の希望が2割弱に達する(男性17.6%, 女性17.8%)。また、「夫婦だけの墓」を望む割合が女性では1割を超え(12.4%)、未婚女性の望む割合(10.0%)と差がない。

信仰と墓との関係については、予想にたがわず、男女とも「散骨」を望む割合は、「信仰している宗教がある」場合よりも「ない」場合に多い($7.8\% < 14.8\%$)。また、女性においては、「信仰している宗教」や「家の宗教」があっても、自分が「そんなに熱心な信者であるとは思わない」場合に、「散骨」希望の割合が多い(12.7%)。ほぼ3分の2の日本人が信仰している宗教をもたず、「信仰している宗教」や「家の宗教」をもっていない場合、その3分の2が熱心な信者でないのであるから、「散骨」に対する心理的抵抗感は、日本では全般として低いのであろう。「散骨」を希望する53歳の女性は、その理由を「信仰も特別にない」から、56歳の女性は、「宗教そのものにあまり意識を感じない」からとしている。中には、「(夫と)宗教が違うので困って」いて「散骨」を希望するという女性もいる(32歳で「宗教はない」; 夫は「家の宗教」が仏教系の新宗教)。

3.4 “墓離れ”の背景を探る

本項では、「散骨を希望する」回答者の特徴をロジスティック回帰分析でみることによって、1990年代から表面化してきた“墓離れ”の背景を探る。“墓離れ”が生じている背景にはさまざまな要因が考えられる。一方では、これまでの墓のあり方に対する疑問、宗教との関わりの変化、生きている時はもとより「死後について」の自己決定権も尊重する態度の広がりといった思想的な背景がある。他方では、世帯構成や家族のあり方が変化してきたことにより、これまでのように墓を継承してゆくことが困難な状況が生じやすくなったという背景もある。戒名や墓の使用権の高騰といった経済的な問題もある。そこで本項では、回答者個人や家族を取り巻く現実からの要請（人口学的要因や経済的要因）の影響と、回答者の考え方や学歴の影響に注目する。

回答者のおかれている状況から発生する現実的な要因としては、配偶関係（未婚であるか、既婚であるか；離婚しているか、死別しているか）、墓を継承する立場にいるか（長男であるか、次三男であるか）、墓の継承者がいるか（継承者となる子、とくに息子がいるか、娘のみであるか）、家の宗教の有無、および経済的状況（世間一般と比べて、世帯収入は平均より多いか少ないか）の要因を取り上げる。一方、回答者の理念的な要因としては、回答者の学歴、信仰する宗教の有無、宗教団体への信頼感、三世同居に対する考え方、政治に対する考え方（リベラリズム）の要因を取り上げる。分析においては、これらの変数に加えて、回答者の年齢（10歳刻み）、居住地の人口規模（13大都市、その他の市、町村）ならびに居住地域（北海道・東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の6つのブロック）の要因をコントロールする。

表1（次頁）は、Q42の質問に対して「7墓に入らず、海や山への散骨にしたい」を選択した者を1、それ以外の1から6を選択した者を0として行なったロジスティック回帰分析の結果である。男性と女性では、要因の影響の仕方が異なるので、男女別に分析している。他の変数の影響をコントロールすると、要因によっては、これまでにみえてきたようなクロス表に基づく結果とは少し様子が異なる。

[年齢・居住地]

まず、コントロール変数として投入した「回答者の年齢」と「居住地」の影響についてみてみよう。女性の場合は、「散骨」を希望する確率は、20代に比べて30代で有意に高く（1.65倍）、40代や50代の中年層でも高い傾向がある。男性の場合は、「年齢」は有意な効果を示していない。「散骨」の考え方が広がり始めたのは近年のことであるが、必ずしも若い世代に特有な考え方ではないといえる。

男女とも「地域ブロック」の影響は認められない。居住地域によって葬送や埋葬の習俗には違いがあるが、「散骨」の考え方は特定の地域に限定されてはいない。一方、居住地域の「人口規模」は、男女とも、有意な影響を与えている。町村の住民に比べて、13大都市の住民は、「散骨」を望む確率が1.6倍高く（男性1.63倍、女性1.66倍）、その他の市の

表1 ロジスティック回帰分析結果 (オッズ比)

独立変数	オッズ比	
	男性	女性
	散骨/散骨以外	散骨/散骨以外
年齢		
(20代)	1.00	1.00
30代	1.30	1.65*
40代	0.78	1.63
50代	1.12	1.54
60代	0.83	0.98
70代	0.67	0.69
80代	0.87	1.08
地域ブロック		
(中部)	1.00	1.00
北海道・東北	1.20	1.32
関東	1.20	1.26
近畿	0.68	0.98
中国・四国	1.32	1.25
九州	0.72	0.78
人口規模		*
13大都市	1.63*	1.66*
その他の市	1.37	1.41*
(町村)	1.00	1.00
兄の有無		
(いない)	1.00	1.00
いる	1.52**	1.02
配偶関係		
(有配偶)	1.00	1.00
死別	0.32	0.94
未婚	0.97	1.07
離別	1.52	1.75*
子ども		*
いない	1.31	1.44
娘のみ	1.06	1.38*
(息子いる)	1.00	1.00
学歴	**	***
(旧制小学・新制中学)	1.00	1.00
旧制中学・新制高校	1.66*	1.57*
旧制高校・短大・高専	1.98*	1.86**
大学・大学院	2.51***	2.79***
信仰する宗教		
(ない/家の宗教はある)	1.00	1.00
ある	0.92	0.66
家の宗教		
(ない/信仰する宗教がある)	1.00	1.00
ある	0.53***	0.91
宗教団体への信頼		
(とても・少しは信頼している/わからない)	1.00	1.00
ほとんど信頼していない	1.45*	1.69***
三世同居		
(望ましい)	1.00	1.00
望ましくない	1.04	1.69***
(共変量)世帯収入：平均よりかなり少ない[1] - 多い[5]	0.72***	0.88
(共変量)政治についての考え方：保守的[1] - 革新的[5]	1.39***	1.63***
カイ二乗値	180.80***	224.83***
自由度	28	28
N	2389	2705

注：.05<p<.10, * .01<p<.05, ** .001<p<.01, *** p<.001

()内はレファレンス・カテゴリー

住民も高い傾向がある(男性 1.37 倍, 女性 1.41 倍)。人口の集中する地域では、学歴水準が高く、政治的にリベラルな傾向があるが、これらの要因をコントロールしても、なおかつ人口規模の影響は消えていない。

3.4.1 現実的な要因

[きょうだい関係]

回答者のおかれている状況から発生する現実的な要因についてみると、男性の場合、回答者自身が長男であるかどうかは、「散骨」を希望するか否かに影響を与えている。「家の墓」を継承する立場にいる長男に比べて、次男や三男は「自分の代から始まる家の墓」を作る以外の選択肢として「散骨」を希望する確率が高い(1.52 倍)。女性の場合は、兄がいるかどうかは、「散骨」の希望とは関係がない。

女性の場合は、本人のきょうだい関係ではなく、配偶者のきょうだい関係の影響を受けている可能性がある。前述したように、JGSS-2000 では配偶者のきょうだいについて尋ねていないが、JGSS-2001 では有配偶者および配偶者と死別した回答者にこの点を尋ねている。そこで、JGSS-2001 のデータのうち、有配偶および死別した女性について、「兄」の有無の代わりに「配偶者の兄」の有無の変数を投入してロジスティック回帰分析を行った(配偶関係の変数は除く)。「配偶者に兄がいる」(=夫は長男ではない)場合のオッズ比は 0.93 で、「散骨」の希望に対する影響はみられなかった(結果表は省略)。

[配偶関係]

女性の場合は、クロス集計の結果にも表れていたように、配偶者と離婚した場合には、現在配偶者のいる場合と比べて、「散骨」を希望する確率が有意に高い(1.75 倍)。前述したように、離婚した女性の 46.4%は「実家の墓」に入ることを希望しているが、「実家の墓」以外に、「散骨」さらに「自分一人の墓」や「(家族以外の人々を含む)合葬式の共同墓」という選択肢が増えている状況を十分認識していると思われる。「散骨」を希望する確率は、離別男性でも高めであるが(1.52)、統計的に有意ではない。男性は、離別しても「家の墓」に入る権利を失わないからであろう。

一方、配偶者と死別した場合には、男性は「散骨」を希望する確率が低めである(0.32 倍;ただし、統計的に有意ではない)。女性の場合は、死別者は有配偶者とほとんど差がない(0.94 倍)。妻に先立たれた男性は、一足先に墓に入っている妻と一緒にすることを了解事項としているのであろう。

[子の有無・子の性別]

自分の墓を継承してくれる者がいるかどうかは、とくに女性において、「散骨」の希望に対して影響を与えている。息子がいる場合に比べて、娘のみのケースや子どものいないケースでは、「散骨」を希望する確率は高く、娘のみの場合は有意に高い(1.38 倍)。

日本では、子どもの有無は配偶関係と強く関連しているので、サンプル全体から有配偶

者と死別者を取り出して、ロジステック回帰分析（モデルから配偶関係の変数のみ除く）を行った。男女とも子どもがない場合には、息子がいる場合に比べて、「散骨」を希望する確率が高い傾向が認められた（男性では1.59倍、女性では1.49倍）。女性では、娘のみのケースのオッズ比も有意である（1.41倍）。

[経済状況]

一方、「散骨」の希望は、回答者の経済状況と関連している。世間一般と比べて、世帯収入が少ないほど、「散骨」を希望する確率が高い。女性では有意確率は10.2%にとどまっているが、男性では強い関連が認められる。“墓離れ”は、人口学的な要因だけではなく、経済的な要因によっても生じていると言える。

「家の墓」を維持するために菩提寺との関係を続けてゆくこと、あるいは「墓」を新たに築くことは、「お金がかかる」と言われている。「散骨」を希望する理由を具体的に記述した中には、「（散骨は）金がかからない」（21歳男）、「墓代もばかにならない。高い」（40歳女）、「金がかかる」（24歳男、31歳男）、「お寺に金がかかる」（30歳男）、「寺に納める費用が多い。年約一人の坊さんに50万位と聞いている」（51歳男）、「死んでお金をとられる。寺の坊さんに」（74歳女）という記述があった。

回答者の経済状況を「世間一般と比べた世帯収入の多寡」ではなく、「階層帰属意識（上/中の上/中の中/中の下/下）」でとらえてみても、社会階層の下の方に位置している者ほど、「散骨」を希望する確率が高い。女性の場合、「散骨」希望と「階層帰属意識」との関連は、「世帯収入」以上に強い（有意確率2.4%）。

3.4.2 理念的要因

以上は、回答者のおかれている状況から発生する現実的な要因についてみたが、回答者自身の理念的な要因の影響も小さくはない。とくに女性の場合は、現実的な要因よりも影響力が大きい。

[政治についての考え方]

男女とも、政治についての考え方として、保守的であるよりも革新的であるほど、「散骨」を希望する確率が高い。政治的に革新的な立場とは、「家の墓」を継承してゆくよりも、「墓から自由」になることの方に、通じるものがあるであろう。

「散骨」を希望する人の中でも、革新層は保守層に比べて、「家または個人の墓に意味が見いだせない」という理由を選択する人が多い（38.0% > 23.5% ; $p < .01$ ）。具体的記述においても、革新層には「墓という考え方が概念として持てない」（37歳男）、「墓という形にこだわらず、時々生活した時を思い出し、語り続けてほしい」（60歳女）、「葬式や墓地など経済主義になり過ぎている」（48歳女）、「土地がもったいない」（29歳女）、「生者のために土地は必要なので」（21歳男）、「エサにでもなればいい」（28歳男）、「人も自然界の動物です」（48歳男）などの記述がみられる。

一方、「生きている時が大切」で「死んだ後はどうでもよい」、「特にこだわらない」という記述は、保守革新の区別なくみられる。また、「自然にかえりたい」という理由の選択率も、政治についての考え方とは関連がない。

[学歴]

回答者の学歴は「散骨」の希望と関連している。男女とも、回答者の学歴が高いほど、「散骨」を希望する確率が高い。学歴による違いは、女性の場合とはとくに顕著である。「散骨」を希望する確率は、大学院卒の場合は、中学卒に比べて、女性では16倍を超える。大学院卒の男性のオッズ比は2.55で、大学卒の男性とほとんど変わらない。大学院卒は人数が少ない(男性32名、女性9名)ので、表1では大学卒と一緒にしている。

政治についての考え方と同様に、「散骨」を希望する人の中でも、学歴が高いほど、「家または個人の墓に意味が見いだせない」という理由の選択率が高い(中学卒15.7% < 高校卒27.3% < 短大・高専卒29.1% < 大学卒38.2% < 大学院卒50.0%; $p < .01$)。28歳の大学卒男性は、政治的には「どちらかといえば保守的」だが、「散骨」を希望する理由として、「この世にいなくなるのに名札はいらない」と述べている。

[三世同居]

女性については、「三世同居」に対する考え方も、「散骨」希望と強く関連している。「一般的に、三世同居は望ましくない」と考えている女性(女性の38.1%はこのように考えている)は「望ましい」と考えている女性に比べて、「散骨」を希望する確率が1.69倍となる。同居に対して抵抗感がある以上、墓で同居することはさらに難しく当然であろう。52歳の女性は、「いじめ抜かれた姑と一緒に墓に入りたくない」と記している。男性では、28.8%の者が「三世同居は望ましくない」と考えているが、「散骨」の希望とは関連していない。

[信仰・家の宗教]

宗教と「散骨」との関係は、複雑である。他の変数の影響をコントロールした場合、信仰している宗教が「ある」かどうかは、男女とも「散骨」の希望とは関連していない。一方、男性の場合、「特に信仰していないが、家の宗教はある」という状況におかれていると、信仰がないあるいは信仰がある場合に比べても、「散骨」を希望する確率が低い(0.53倍)。男性は、墓に関して、現実的要因を重視しているようである。女性では、このような違いはなく、「散骨」の希望は、信仰する宗教が「ある」かどうかとも、「家の宗教はある」という状況とも関連していない。

一方、「宗教団体への信頼感」は、男女とも「散骨」の希望と関連している。宗教団体をほとんど信頼していない場合には、信頼している場合や「わからない」と感じている場合に比べて、「散骨」を希望する確率が有意に高い。「散骨」を希望する人の中でも、宗教団体をほとんど信頼していない人は、「家または個人の墓に意味が見いだせない」という理由の選択率が高い(31.2% > 22.5%; $p < .05$)。

4. おわりに

1980年代後半から表面化してきた<墓>意識の変化の背景については、これまでも議論が行われている(井上, 1990; 森, 1993; 楨村, 1996; 井上, 2000; 森, 2000; 小谷, 2000など)。本稿では、全国調査のデータを用いて、「墓に対する希望」が実際にどのような層において多様化し、これまでに議論として上がってきたさまざまな要因や仮説が、「墓に対する希望」の多様化や“墓離れ”に対して、現実に影響しているのかどうかを検証することに主眼をおいた。

まず、<墓>意識の多様化については、1) 家制度の影響を色濃く残しながらも、「家の墓を継承する」という伝統的な家意識からの離脱傾向がみられる、2) この傾向は男性よりも女性の方が強い、3) 墓に対する意向は配偶関係と関連しており、とくに離別女性や未婚女性では希望が多様化している、4) 有配偶女性においても、「実家の墓」や「散骨」の希望者がそれぞれ1割を超えていることを確認した。そして、<墓>意識の多様化の背景については、5) 「(家族以外の人々を含む)合葬式の共同墓」を希望する人々の大半は、「家または個人の墓に入りたい」という希望をもちながら、「子どもをわずらわせたくない」あるいは「墓を守る人がいない」という理由から「家または個人の墓」をあきらめている、6) 「子どもをわずらわせたくない」という気持ちは、息子をもつ者よりも娘のみの場合に強く、7) 「墓を守る人がいない」という回答は、息子をもつケースでは少なく、娘のみのケース、子どものいないケースの順に増す、8) 「散骨」の希望者には、自然回帰願望が強い、9) 「共同墓」希望者の25%および「散骨」希望者の3割は「家または個人の墓に意味が見出せない」ことを理由にあげていることを示した。さらに、“墓離れ”は、10) 若い年齢層や特定の地域に限定して生じているのではなく、11) 墓の継承者の有無をめぐる人口学的な要因や理念的な要因のほかに、経済的な要因も働いており、12) “墓離れ”の背景は、男性と女性で微妙に異なることを明らかにしている。

このようにみてゆくと、現在の葬送や埋葬のシステムがもはや、現代を生きる人々の家族構造や意識や経済状況に合わなくなってきたことをデータは明確に物語っている。親の意思でもなく、ましてや家のためでもなく、自らの選択に従って生きることを強調してきた社会であるにもかかわらず、人生の終焉という最終地点における選択肢が非常に限られていることに対する当惑が、<墓>意識の多様化や「墓」からの自由を求める運動を生み出したといえる。JGSSによると、現在の日本では、自分の死についても自己決定を重んじる傾向が強い。安楽死の法制化への賛同は、3分の2を占めている⁽⁴⁾。生きている時はもとより、自分の死についても、さらに自分の死後についても、自らの意思を反映させたいという意識に沿う葬送や埋葬の選択肢を増やす時代にいたった。とくに、<墓>の問題が理念的な問題にとどまらず、経済的な問題になっている層があることに留意して、自治体の運営する墓地のあり方についても、資格や埋葬の方法を含めて選択肢を見直すべき時期にあることをデータは示している。

[注]

- (1) 本稿は、JGSS-2000 のデータを基に論述した論文（岩井，2002a）を加筆・修正したものである。JGSS-2000 のデータに JGSS-2001 のデータを加えて、再分析ならびに追加分析を行っている。また、「共同墓」あるいは「散骨」を希望する回答者による具体的理由の記述について、内容を分析している（JGSS-2000 では 39 名；JGSS-2001 では 42 名）。
- (2) 回収率の算出については、JGSS-2000 および JGSS-2001 の『基礎集計表・コードブック』または JGSS のホームページに詳しい。
- (3) ライシャワーの場合、すべてを散骨したわけではなく、墓もある。
- (4) 設問は、「不治の病におかされた患者が、痛みを伴わない安楽死を望んでいるとします。その家族も同意している場合には、医者が安楽死を行なえる法律をつくるべきだと思いますか。」選択肢は、「はい」「いいえ」「わからない」であり、回答の分布は、順に 67.7%、6.4%、25.4%、無回答が 0.6%。

[参考文献]

- 博報堂生活総合研究所（編），1998，『調査年報 1998 連立家族 日本の家族 10 年変化』博報堂生活総合研究所。
- 井上治代，1990，『現代お墓事情 ゆれる家族の中で』創元社。
- 井上治代，1998，「高齢者の死と葬送」『高齢者の保健福祉に関する総合的調査研究報告書 財団法人長寿者会開発センター委託事業』高齢者保健福祉研究会（編）pp.56-69。
- 井上治代，2000，『墓をめぐる家族論 誰と入るか、誰が守るか』平凡社。
- 岩井紀子，2002a，「＜墓＞意識の多様化 JGSS-2000 のデータ分析を通して」『大阪商業大学論文集』第 124 号，pp.57-72。
- 岩井紀子，2002b，「墓と日本人」『日本人の姿 JGSS にみる意識と行動』岩井紀子・佐藤博樹（編）pp. 307-312。
- JGSS HP <http://www.jgss.daishodai.ac.jp>
- 加藤彰彦，2001，「死生観のゆくえ 死と出会う日本社会」『変容する人生 ライフコースにおける出会いと別れ』大久保孝治（編），コロナ社，pp.148-169。
- 小谷みどり，2000a，『おとむらい新世紀』東京新聞出版局。
- 小谷みどり，2000b，『変わるお葬式、消えるお墓 最後まで自分らしく』岩波書店。
- 槇村久子，1996，『お墓と家族』朱鷺書房。
- 森謙二，1993，『墓と葬送の社会史』講談社。
- 森謙二，1998，『墓地に関する意識調査』（平成 9 年度厚生科学研究）。
- 森健二，2000，『墓と葬送の現在 祖先祭祀から葬送の自由へ』東京堂出版。
- 野々山久也，1995，『高度技術社会における家族のライフスタイルについての実証的研究』（平成 6 年度 科学研究費補助金：重点領域研究『高度技術社会のパースペクティブ』）

研究成果報告書)。

大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所(編), 2002, 『日本版 General Social Surveys-2000 (JGSS-2000) 基礎集計表・コードブック』東京大学社会科学研究所。

大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所(編), 2003, 『日本版 General Social Surveys-2001 (JGSS-2001) 基礎集計表・コードブック』東京大学社会科学研究所。

総理府, 1990, 『墓地に関する世論調査(平成2年7月調査)』。

葬送の自由をすすめる会(編), 1991, 『<墓>からの自由 地球に環る自然葬』社会評論社。

葬送の自由をすすめる会[弁護士] 梶山正三・薦田哲・宮田桂子, 1992, 『死んでもお墓に入りたくないあなたのための法律Q & A』社会評論社。

葬送の自由をすすめる会(山折哲雄・安田睦彦)編, 2000, 『葬送の自由と自然葬 うみ・やま・そらへ還る旅』凱風社。

SSJ データ・アーカイブ HP <http://www.iss.u-tokyo.ac.jp/ssjda/>

高橋幸一・井田美恵子, 1995, 「世論調査レポート 結婚からお墓まで、新しいライフスタイルに共感」『放送研究と調査』6月号, pp.2-13, 66-71。

高橋繁行, 1993, 『読まずに死ねるか! お葬式の研究』大月書店。